

誤訳と「誤解」から 生まれた珍説

トロツキーの著作の邦訳には、かなり誤訳が多く、それがあつた種の偏見と結びつくとき、たいへんな「誤解」と珍説を生産する。

珍説A 「永続革命論の第二の側面は、社会主義革命をも永続的なものとして特徴づける。無限の長期間にわたつて、また不断の内部闘争において、すべての社会主義的關係は変革される。」(神利夫「現代トロツキズム批判」、新日本新書、四六一四七ページにあるトロツキー「永続革命論」の序論の一部分の引用)

ここから神氏はつぎのように述べる。
「……けっきょく社会主義革命は『無限

の長期間(一)』にわたることになる、というのである。……なんのことはない。『永続革命論』の論理上の終末は、社会経済構成体としての社会主義は無限にこないし、めざすべくもないということになる。」(四七ページ)

しかし、私が傍線を付した文の原文(ロシア語版)からの正しい訳はこうである。「その期間を確定できないある長い時間にわたつて」(By neskol'ko neopredelennomu dlinnoyemuy periodu)、「また不断の内的闘争において、すべての社会的諸關係がつくりかえられる。」(傍点中野)

この期間があらかじめ確定できないことは、理の当然であらう。なお「文学と革命」のなかでは、社会主義への移行の期間についてトロツキーはこういつて

「われわれは社会主義への移行についてのあまりに樂觀的な考え方をしりぞけるとしても、世界的な規模での社会主義革命の期間は短期間ではなく、何十年とかかるが、何百年、ましてや何千年とかか

るものではないことを強調したい。」

そしてトロツキーは、この何十年程度の期間では、独自の階級文化としてのプロレタリア文化は形成できない、と主張しているのである。

神氏は、おそらくオルギンの英訳からの姫岡玲治による重訳(「トロツキー選集」5現代思潮社)に含まれた誤訳をそのままのみにして、あるいは故意に活用して、このような珍説を創造されたと思われる。

珍説B 「政治権力が労働者階級の手に移るべき日時は、生産によって達せられた水準に直接に依存するのではなく、階級闘争の諸關係によつて、国際情勢によつて、終局的には、伝統、イニシヤティブ、闘争準備などの主体的要素によつて決定されるのである。」(神氏前掲書、五〇一五—ページ)

この個所の正確な訳文は、つぎの通りである。

「権力が労働者階級の手に移行する日時(Moments H hours)は、生産力の水準に直

接し、依存しているのではなく、階級闘争の諸關係や国際情勢に、最後に(Rechnung)伝統とかイニシヤティブ、闘う決意など一連の主体的要因に依存している。」ここで問題とされているのは、権力移行の日時であるが、トロツキーの文章は、それが生産力の水準に直接に(bezposredstvenno)依存せず、階級闘争の諸關係や国際情勢などの客観的要因にも、そして最後に一連の主体的要因にも依存することを——まったく正当に——述べているにすぎない。

神氏の先の引用は、「トロツキー選集」5の訳文とも、またもちろん一九七〇年に初版が出たロシア語からの邦訳である『第二期トロツキー選集』(現代思潮社、原陣之訳)の訳文とも違うから、おそらく氏自身によるロシア語原文からの直接の翻訳であらう。

それにしても、これはかなりひどい意図的「誤訳」である。

第一に、トロツキーの原文は、ごらんの通り、「直接に」だけを強調している(隔

字体で)——姫岡訳でも同じ——のに、

神氏は、この原文の強調をはずし、そのかわりに、主体的要因の部分に、原文にない強調を勝手にほどこしている。

第二に、トロツキーの原文では、客観的要因のあとに「最後に」主体的要因をあげているのであるが、神氏はこの「最後に」を姫岡訳と同じく「終局的には」と訳している。しかし、(nakonecu)には、①終りに②はてはといった程度の意味しかないことは、ご存知のはずである。そして神氏は、このように引用文を改作したうえで、「終局的には」つぎのような断定にまで飛躍する。

「カウツキーやトロツキーにまつまでもなく、資本主義の経済的発達の水準が、そのまま直線的に革命運動の政治的力量の強化となつてあらわれるといえない。

……しかし、右のわかり切ったことを根拠として、だから発達した資本主義国においてはプロレタリア社会主義革命の「社会的条件は成熟」していると結論づけ、さらに「終局的」な問題はひとえに「主

体的要素によって決定される」と断じていくのは、まことにひどい主観主義的な飛躍である。」

こうして、権力移行の日時を規定する要因のひとつが主観的要因であるというトロツキーのまったく正当な指摘は「終局的」な問題はひとえに主観的要素によって決定されるとトロツキーが断じた、といういつわりの命題に改作された。そして辯氏は、これこそが永続革命論の「哲學的基礎」だ、とおこそかに宣言するのである。

これこそおそまつきわまりない主観主義的な歪曲であり、ゴルバチョフがめざしているものとはまったく違う、トロツキーの文章の辯式「ベレストロイカ」(作るかえ)である。

そしてその手口は次の諸点にある。

1 まず、誤った訳語「終局的に」を「極限」とともに採用すること。

2 次にこの訳文中の強調を勝手につけかえること。

3 「最後に」、この訳文の意味すらを

も恣意的に作りかえること。すなわち、この訳文からも、移行の時期が「ひとえに」主観的要素によって決定される、などという断定はけっして出てこないのに、辯氏が創造した

「ひとえに」を、トロツキーにおしつける。さらに、問題は権力移行の時期の問題であるのに、かの「終局的に」を「終局的問題」にすりかえ、あたかも根本問題のすべてがひとえに主観的要素によって決定されるかのごとく、描き出すこと。

トロツキーは果たして主観主義的な冒險主義者だったろうか？ トロツキーがどれほど慎重かつ綿密に一〇月蜂起を準備し、成功させたかは、本章が、よりくわしくは彼の「ロシア革命史」が説明してくれらるだろう。

また初期コミンテルンでは、彼はレーニンとともに極左の一揆主義に一貫して反対し、とくに一九二一年のドイツ共産党の三月行動後に開かれた第三回大会では、まず大衆を獲得することの意義を強

調し、統一戦線の方針を提起して、三月行動の路線を擁護しようとしたブハーリンや各国の極左主義者となたかった。

レーニンとトロツキーが参加した第二、四大会は、統一戦線がコミンテルンの中心的戦術だった。ところが、レーニンが病死し、トロツキー排撃が始まっていた第五回大会では、極左主義者が台頭し、フアシズムと社会民主主義は……現代資本主義の右手と左手である」というセクト主義的テーゼが承認された(戦術問題についてのテーゼ)。悪名高い社会フアシズム論の先駆である。そしてこの社会フアシズム論を批判し、ドイツ・フアシズムの独裁樹立の危険に対して全労働者が統一してたたかうよう一貫して訴えた人こそ、トロツキーその人だった。

ゆがめられた「常識」を捨て、いつわりの封印を破り、真実の窓をあけ放とう。「官僚主義の本質は、本当の価値を虚偽の価値に変える点にある」(ソ連作家同盟第八回大会でのエフ・クズネツォフの発言から)